

2017 年度

## 全日本少年サッカー大会 12 ブロック代表決定大会・準々決勝レポート

表記大会の準々決勝が、快晴の空の下 11 月 3 日(金)に素晴らしい天然芝の八石下グラウンドで行われた。中央大会への切符を争う 4 試合の中から、八王子市内のチーム同士の対戦となった 2 試合「清水北 FC vs 小宮 SC」と「白百合 SC vs 館町 SC」をレポートする。

清水北 FC 0  $\left\{ \begin{array}{l} 0-0 \\ 0-0 \end{array} \right\}$  0 小宮 SC

PK 戦 6-5 で清水北が中央大会への切符を掴み、準決勝進出

清水北が 3-2-2、小宮が 3-3-1 のフォーメーションで試合が始まった。立ち上がりは、両チームともリスクを避けて早めに前線にボールを蹴り、清水北は左サイド FW 5 番と中央から右サイド FW 17 番に、小宮はワントップの 7 番と右 MF の 14 番にボールを預けて局面を打開しようとしていた。

2 分、小宮右 MF の 14 番が流れるようなトラップで素早く振り向いて、右サイドを駆け上がり、中央にクロスをあげ 7 番がシュートを放ったが清水北 GK 1 番の正面であった。6 分、早くも小宮が選手交代。左 MF の 10 番を下げ、18 番を投入した。8 分、その 18 番が中盤で前を向いて中央の 7 番に繋ぎ、さらに右 MF の 14 番に繋ぎ、ゴール前にクロスを上げた。残念ながらシュートには結びつかなかったが、ピッチをワイドに使った素晴らしい展開であった。9 分には小宮のセンター MF 12 番がドリブルで清水北陣地に攻め入った所に、左 MF 18 番が大きな声を出し左腕を上げながら駆け上がりパスを受けた。清水北 DF (11 番?) が素早く対応し、クロスを上げさせなかったが、これも中盤での素晴らしい展開であった。12 分、清水北の左 MF の 6 番が、自陣でボールをカットして素早いドリブルで小宮陣地に攻め上がった。残念ながら次に繋がらずシュートまでは持ち込めなかったが、単純に蹴り返すだけではなく、スペースがある場合には積極的なドリブルで仕掛け、小宮の守備陣のバランスを崩そうとしており、キラリと光るプレーであった。15 分、小宮 GK 1 番がキャッチしたボールを右サイドに開いた 14 番にスローイングで繋いだ。14 番は右タッチラインを背にする綺麗なハーフターン（ボールを受ける前にあらかじめ攻撃方向の視野を確保する半身の態勢をとるターン）で素早く前を向き、右サイドに流れてきたトップの 7 番に繋ぐために丁寧なグラウンダーのボールを右タッチライン際へ流し込んだ。この 14 番は基本的なボールコントロールに優れており、将来性を感じさせた。攻守が切り替わる瞬間の意識をさらに研ぎ澄まし、判断を素早くできるようになって次のステージに進んでくれることを期待したい。16 分、清水北のベンチからの指示により、前線の 5 番と 17 番のポジションが変更された。前半はやや小宮が押し気味の展開が続いていたので、ベンチと

しても流れを変えたいと考えたようである。指導者の皆さんには、ジュニア年代でポジションを固定してしまうのではなく、選手達に是非とも複数のポジション経験させて欲しい。左右だけでなく前後を入れ変えたり、時にはGKにフィールドを経験させたり、フィールドプレイヤーにGKを経験させることも良いであろう。少し古い話となるが、現在アビスパ福岡の監督をしている井原正巳は、現役時代は日本を代表するディフェンダーの一人で「アジアの壁」とも呼ばれていたが、高校時代まではトップの選手であった。その時代の経験が相手の動きを素早く予測することに繋がったと考えられる。前半は両チームとも無得点で、決定的なチャンスもないまま0対0で終了した。

ハーフタイムは3分間という短い時間であったが、さすがにここまで勝ち上がってきた両チームだけあって、選手をすぐに座らせコーチが作戦ボードも使いながら語りかけていた。数年前まで見られた選手を立たせたまま、コーチが座って指示を与える場面はほとんど見られなくなった。多くの指導者にプレイヤーズファーストのこの姿勢を是非とも見習って欲しい。一点だけ指摘させていただくと、清水北のベンチでは選手を地面に座らせ、コーチが太陽を背にする方向で話をしていたため、選手が眩しそうであった。普段の練習でも選手を集めてアドバイスをする時は、指導者は選手の背中側に太陽が来るようにすると、コーチの顔が見やすくなるので、さりげなくコーチが立つ位置を変えて話をするように心がけていただきたい。

話す内容としては厳しい指摘も聞こえてきたが、コーチのその選手に対する期待の裏返しであろうと思われた。指導者は、保護者から大切な子どもを選手として預かり、ジュニア年代というゴールデンエイジを迎える大切な時期の指導を任されている。チームを勝たせたいからといって選手を罵倒したり人格を否定するような表現をしてはならないが、時には厳しい指摘はしなくてはならない。日頃から選手との信頼関係を築いた上で、改善すべき点は厳しく指摘し、選手が奮起するように導いていただきたい。

後半、小宮はトップの7番を前半6分でベンチに下げていた10番に代えてスタートした。7番は、前線でボールを受け、押し上げてくるMFに丁寧に繋ぎ、ゴール前に上がってシュートを狙うプレーを繰り返していた。ケガを抱えていたようで、ベストの状態ではなかったようであるが、基本技術が安定しており、的確な判断もできる選手であった。今後の成長に期待したい。1分、交代して再投入された小宮の10番が、ハーフウェイラインを超えたところでボールを持ち、首を振って状況を判断した後に、縦方向のグラウンダーのパスをゴール正面に出した。残念ながらシュートには結びつかなかったが、しっかりと状況を観て判断し、意図を持ったパスを出していたことがよくわかった。この日も、中央大会への切符を争う重要な試合であることもあり、周囲からの保護者や指導者の声が途切れることなく選手たちに浴びせられていた。中には悲鳴にも似た金切り声もあり、プレーする選手達の判断を否定するような声も聞かれることがあった。昨年度のレポートにも書かせていただいたが、筆者自身も恥ずかしながら指導者としての講習を受けてきちんと勉強するまでは、選手の判断を奪うような指示の声をよく出していた。しかし、目先のチームの勝

利ではなく、選手を素晴らしいサッカー選手に育てようとするのであれば、選手が『試合の流れの中で』『味方と相手の位置をシッカリと観て』『よりゴールに繋がる（失点を防ぐ）可能性の高い判断をする』機会を奪ってはならない。試合は技術と戦術的判断力を磨くための最高の練習の場と考えることもできる。試合後にうまくいかなかった場面を再現して練習をさせようとしても、試合中の緊張感を伴わないので、本当にその場面を再現することは難しい。指導者の皆さんには、選手がそれぞれの場面でどのような判断をしたのかを聞いてあげる姿勢を持った上で、選手に以下のことを繰り返し語りかけて欲しい。

- ・サッカーは刻々と変化する状況の中で、ボールを持っている者と持っていない者が、どうすれば得点につながるか（失点を防げるか）を瞬時に考え、決断し、実行しなくてはならない『判断のスポーツ』だよ。周囲の声に惑わされることなく、自分で判断する習慣を身に付けようね。（この点では、試合中にタイムを取り指導者が指示を出すことできるスポーツとは明らかに違う。）
- ・コーチは時々「あの時は何を観て、あの判断をしたの？」と尋ねるからね。よく周りの状況を観よう。全く何も考えず、ボールを蹴っ飛ばすようなプレーはやめようね。
- ・お父さんやお母さん、時にはコーチが指示したプレーではなく、自分が『こっちの方がより良い』と判断したプレーしたのならば、コーチは叱らないよ。でもそのプレーが得点に結びつかなかったり、失点に繋がったら何が悪かったのかをコーチや仲間と一緒に考えようね。

2分清水北の攻撃、左サイドから小宮ゴール前にボールが送られ、ゴール前でFW5番が絡んだ後にこぼれてきたボールを、押し上げてきた右MFの10番がミドルシュートを放ったが惜しくも右に外れた。4分、小宮が左サイドを突破しようとしたが突破しきれず、中央に押し上げてきたセンターDFの5番に繋いだ。5番のミドルシュートは枠を捉えたが、清水北GK1番の正面であった。この5番は、1分後にも左から中央に繋がれたボールを受け、ハーフウェイラインを超えたあたりでロングシュートを放った。今度は枠を捉えることができず上に外れてしまったが、センターDFでもチャンスと見るとシュートを狙う姿勢は素晴らしかった。6分、清水北は右奥のスローイングを右DFの11番が投げ、FW5番が受けた後に11番に戻した。11番がゴール前にハイクロスを上げ、?番がヘディングシュートを打ったが惜しくも外してしまった。このように後半の立ち上がりは、両チームがシュートに持ち込む場面が増え、得点のにおいが漂い始めた。この時、小宮センターDFの5番から「ボールウッチャーにならないで！」という声がチームメイトにかけられた。ベンチからの指導者の声ではなく、選手同士でこのような戦術的な声掛けがなされることはとても素晴らしい。多くの選手に見習ってほしい声であった。8分、清水北の5番が右サイドでボールを受け中央へクロスを上げ、もう一人のFW17番が胸でトラップをしてシュートを放ったが枠を捉えることができなかった。9分には同じく清水北の5番が今度は中盤の左サイドでボールを足元で受け、素早く振り向いてドリブル突破を仕掛けたが、小

宮の右DF 11番が粘り強く対応し、突破を許さなかった。見応えのある1対1の攻防であった。清水北の5番はスピードのある選手のように見えたが、この試合では小宮に警戒されていたこともあり良い面を消されていた。オフ・ザ・ボールの動き（ボールを持っていない時の動き。例えばパスを受ける直前のプル・アウェイや相手のDFラインの押し上げでオフサイドにされないようなウェーブの動き等）や、ファーストタッチで相手をかかわすプレー、スピードに乗ったドリブル等を磨き、次のステージで大きく飛躍してほしい選手であった。10分、小宮の右からのコーナーキック、左MF 18番がヘディングを放ったがわずかに外れ、頭を抱えた。ここで小宮は一旦ベンチに下げていた7番を10番に代えて再度投入した。11分、清水北の右奥でのスローイングでは、後半6分と似たような場面が再現されてしまった。11番が10番に投げ、10番は足元で受けた後に11番に戻して11番がゴール前にクロスを上げた。このプレーはそれほど複雑なプレーではないので、小宮の選手達がなぜスローイングを投げる11番をケアしないのか不思議に感じた。単純だが、動きの中でゴール前にボールを入れられてしまうので、小宮のピンチとなってしまう。どのチームも自陣深い位置での相手のスローイングでは、ボールを投げ入れるスロアーにもマークを付けることを忘れないようにしてほしい。14分押し上げてきていた小宮右DF 11番が低いシュートを枠に飛ばし、清水北GKがこぼしてしまった。清水北がヒヤリとさせられた場面であった。15分小宮の右コーナーキック左DF 15番のキックを右MF 14番が頭で捉え、ヘディングシュートを放つがまたも右に外れてしまった。16分、小宮のセンターMF 12番が中央でボールを保持し、相手をかかわして右サイドの14番に丁寧に繋いだ。14番は早いグラウンダーのクロスをゴール前に流し込んだが誰も触ることができず、惜しくもゴール前を通過してしまった。18分に清水北の最大のチャンスが訪れた。スローイングを受けた5番が横に押し上げてきた10番に渡し、中央の7番（17番？）に繋ぎ小宮GK 1番との1対1の場面を作った。しかしGKが何とか足に当て、ピンチをしのいだ。小宮GK 1番と清水北GK 1番は共に、自分が処理する際の「OK！」の声が明確で、安定した守備力を見せていた。この試合がPK戦となったのも両GKの守備力が高かったことが大きな要因であろう。特に小宮の1番は前半から積極的に前に出てペナルティエリア外のボールもたびたび足で処理し、非常に守備範囲が広いGKであった。両GKの今後の成長も楽しみである。19分、小宮左MF 18番が中盤左からのフリーキックをゴール前に蹴り込む。その跳ね返りを押し上げてきたセンターDF 5番がロングシュートを放つ。そのシュートが清水北の選手に当たり惜しくもゴール左に外れた。もし枠に入っていたら、コースが変わっていたのでGKも対応できておらず得点になっていたであろう。

このような息詰まる攻防が最後まで続いたが、両チームとも得点を奪うことができず、0対0のまま試合が終了し、PK戦の結果、清水北が中央大会への切符を手にした。清水北には12ブロックの代表として中央大会でもぜひ勝ち上がってほしい。一方負けた小宮の選手達には、この悔しさをバネにして最後までチームでの練習や試合に取り組み、技術や戦術的な判断力をさらに磨いてジュニアユースのステージに進んでほしい。君達の

サッカー人生は始まったばかりである。清水北の選手達も含め、君達が克服しなくてはならない課題はまだたくさんある。向上心を持ち続け、身体が大人になるユース年代で素晴らしいサッカー選手になれるよう、謙虚な気持ちで努力を続けていくことを期待している。

白百合 SC 4  $\left\{ \begin{array}{l} 2-0 \\ 2-0 \end{array} \right\}$  0 館町 SC

この試合の両チームは共に3-1-3（又は3-3-1）のフォーメーションであった。立ち上がりの40秒、館町のプレスが甘いと見るや、いきなり白百合の右DF30番がロングシュートを枠に飛ばしたが、館町GK21番の正面であった。館町ベンチからはライン際の守備場面で「挟め、挟め！」の声が飛んだ。筆者（還暦が近づいてきた50歳代後半）がサッカーを始めた頃は、DFは相手とゴールを結んだライン上でマークをし、その隣のDFはカバーを意識することは強調されたが、前線の選手が戻ってきて相手を挟み込むことはほとんど求められていなかった。それがクライフのオランダがトータルフットボールで世界を驚かせ、アリゴ・サッキのACミランがプレッシングサッカーでクラブW杯（当時はトヨタ杯と呼ばれていた）の優勝に輝いた頃から、FWやMFが前線からプレスをかけ、特にライン際では相手を挟み込むことが、徐々にサッカー界での常識となっていった。DFラインのお仕上げが多くのおフサイドを発生させたため、FIFAは次々にオフサイドルールの変更を打ち出していった。現在では、ボールを保持する相手を挟み込むことがジュニアのブロック大会でも選手に求められる時代となり、改めてサッカーが進化していることを感じる。

3分、白百合のベンチからは「丁寧に、失わない！」という声が飛んだ。これは日本に多大な影響を与えたバルセロナのポゼッションサッカーが強調している点である。ポゼッション率（ボール保持率）を上げることが目的となってしまっただけではサッカーの本質（相手から得点を奪う）を見失うことにもなりかねない。その為、現代表監督のハリルホジッチが警鐘を鳴らしているように、目的化することには気を付けなくてはならないが、ジュニア年代を指導する際には指導者に是非こだわってほしい点でもある。個人としてグループとしてボールを簡単には失わない技術と判断力を是非とも磨かせてほしい。

同じく3分、白百合にアクシデントが起こった。中心選手の一人である右FWの35番が鼻血のため23番と交代したのである。しかし選手層の厚い白百合には動揺は見られなかった。5分、館町が白百合陣地奥のスローイングを得る。右DF18番がスローイングからのリターンを受け、単純に放り込まず中央を押し上げてきたセンターDF16番に下げた。16番はロングシュートでゴールを狙ったが右へ外れてしまった。9分、白百合はセンターFW36番が相手DFの処理を誤ったボールを奪いシュートを放ったが、館町GK21番の正面であった。続けて白百合センターMFの12番も相手からボールを奪い取り、シュートに持

ち込んだ。10分には鼻血の止まった35番が左FW20番と交代してピッチに戻ってきたが、すぐさま後方からのパスを受けて素早く前を向き、細かいステップとタッチのドリブルで相手を振り切り、そのまま低いシュートをゴール左隅に決めた。35番はこの年代ではトップレベルのドリブル突破力を有しており、その後もたびたび局面を開いていった。謙虚な気持ちを持ち続けて努力を重ね、次のステージで大きく羽ばたいてほしい選手であった。すでに行われているかもしれないが、白百合SCはジュニアユースチームも運営しているため、35番は飛び級で中学生と一緒に練習や試合をやらせていくことをお勧めしたい。12分、館町は右サイドを攻略し、ゴール前にクロスを上げた。そのクロスボールに押し上げてきた左DF19番が飛び込んだが、うまくミートできずに転倒してしまった。しかし19番はすぐに立ち上がりこぼれてきたボールに反応して再びシュートを打つが、惜しくもゴール右に外してしまい頭を抱えた。ここで同点に追いついていけば試合の流れを引き戻せたかもしれないので、惜しいチャンスであった。15分、白百合はボールを奪った右DF30番が、落ち着いて左に開いていったセンターDFの26番に横パスを展開し、更に左に開いて戻ってきたセンターFW36番に繋いだ。ピッチを広く使い、相手の布陣を広げる素晴らしい展開であった。16分、白百合は相手陣地左からのスローイングで中央のセンターFW36番に繋ぎ、36番が相手DFを引きずりながらドリブルでゴールに迫り、最後はトゥキック気味のシュートをゴール左に決めた。この得点に繋がったスローイングは、白百合の選手が蹴ったボールが左タッチラインを割りそうな時に、センターDF26番がダッシュしてタッチライン際まで諦めずに追いかけたことでマイボールにしたものであった。地味なプレーではあるが、チーム全体がボールを大切に攻め続けようとする姿勢が表れたプレーであった。白百合の指導者が、日頃からボールを簡単に出してしまわず、大切にすることを選手に求め続けていることがうかがえた。18分、白百合のセンターMF12番が、中盤の左をドリブルで上がり、中央に押し上げてきた右DF30番に繋いだ。30番はゴール正面でシュートを打つと見せかけて、さらに右FW23番に繋いだ。23番の狙いすましたシュートは惜しくもゴール左に外れてしまった。筆者の角度からは確認できなかったが、シュート角度から考えれば30番のほうがゴール正面であっただけに、30番にシュートコースが塞がれていたのかどうかを確認してみたいプレーであった。白百合はDFラインでしっかりとボールを繋ぎ、相手の陣形を揺さぶりながら攻めていたが、一度だけ近い距離で繋いだ場面があった。その際にベンチからは「2mのパスはいらない。その距離で繋ぐならGKまで下げろ！」という具体的な指示が出されていた。自陣で短い距離の横パスを繋ごうとして受け手がタッチミスをしてしまうと、相手のFWにカットされ一気にゴールに迫られてしまう危険性が高くなる。チームによっては「その距離で繋ぐと危ないから、縦に蹴っておけ！」という指示を出してしまうこともあるのではないだろうか？ 白百合がいかにポジションにこだわっているかがわかるシーンであった。現代のサッカーではGKも足元のプレーの精度を求められている。GKもパス回しに参加させることで、よりプレーの幅が広がる。ジュニア年代でもぜひ参考にしてほしいアドバイスであった。前半はそのま

ま2対0で終了した。

ハーフタイムではこの両チームも選手を座らせ、コーチがピッチ側に立って話しかけていた。2点をリードされた館町は「大丈夫、大丈夫」とコーチが選手を落ち着かせ、「GKはもっと声を出して前に出てくること。集大成として今までやってきたことを全部出そうよ！」と選手たち具体的な指示を出すとともに元気づけていた。白百合は大きな作戦ボードをサブコーチが支え、メインコーチが磁石を動かしながら戦術的な動きの確認をしていた。「どちらのボールになるかわからないルーズボールを、マイボールにするために反応を早くしよう！」と指示を出していた。3分間という短い時間ではあったが、それぞれのベンチが後半に向けた有意義な時間としていた。前半で指導者が何を分析すべきかは、昨年度のレポートにまとめている。筆者は長くユース年代を指導してきたので、ジュニア年代ではより焦点を絞り、2～3点のアドバイスにとどめた方が良いと思われる。その為、前半の終了時には何を話すかを決断しておくべきであろう。指導者の皆さんには、昨年度のレポートも読んでいただけると幸いである。(八王子協会HPのトップページ右上「委員会」の中の「技術委員会」をクリックすると過去のレポートがある。)

後半開始直後、白百合ベンチからは中央の選手がボールを保持している際に、サイドの選手に対して「ウェーブ！ウェーブ！」というオフ・ザ・ボールの動きに関するアドバイスが出された。ここでも白百合が日頃の練習からオフ・ザ・ボールの動きを意識させた練習を取り入れていることがうかがえた。1分、白百合右DF30番が、中央の混戦の中でマルセイユルーレットを使って前を向き、ワンドリブルして相手を引き付けてから右FW35番に繋いだ。35番は細かいタッチのドリブルで館町のペナルティエリア内まで進み、中央へ低いクロスを上げた。得点には結びつかなかったが相手守備陣形を崩す素晴らしい攻撃であった。この白百合の右DF30番は、DFラインで回したボールを受け、シッカリと状況を観た後にセンターMF12番や、逆サイドから押し上げてくる左DF15番、更に前線の右FW35番に丁寧なパスを繋いでいた。ジュニア年代で身に付けてほしいプレーをシッカリと試合中に表現してくれており、次のステージでもさらに伸びてほしい選手であった。4分、館町の右DF18番が左DFの19番に繋いだ。19番は縦への突破ができないと見るや、センターDFの16番に戻し、ボールを受けた16番は、右サイドに引いてきた右FW17番に繋いだ。白百合と対戦する中で、館町もボールを大切にするポゼッションサッカーを試合の中で表現することができるようになってきているように感じた。館町の右DF18番は、7分に白百合陣地のペナルティエリア内までドリブルで仕掛け、8分にも右ライン際を突破する等、何とか得点に繋げようと非常に積極的なプレーをしていた。今後の活躍に期待したい。9分には館町センターFW15番が右サイドから強めのシュートを放つも白百合GK34番の正面であった。後半のこの時間は館町が白百合を押し込んでシュートまで持ち込むことができていたが、得点に結びつけることはできなかった。館町ベンチからは「来てるよ～来てるよ～、流れが来ているよ～」とチームを鼓舞する声が飛ばされ、白百合ベンチからは「ここでは大きく切って、流れを呼び戻そう！」という声が飛ばされている。

た。11分、館町センターFW15番が、自陣中央から受けた縦パスをワンタッチでスペースに流し込み、自身のスピードを生かして白百合ゴールに迫ろうとした。しかし、カバーしていた白百合センターDF26番(?)が素早く対応して阻止した。館町15番はスピードのある選手ではあったが、白百合にシッカリと対策をとられている印象であった。サッカーは陸上競技の短距離走のように、自分のコースを誰にも邪魔されること無く走って記録を競うスポーツではない。相手との駆け引きの中で時には身体をぶつけ合いながらボールをコントロールし、GKが構えているゴールをこじ開けて得点を奪わなくては勝てないスポーツである。前の試合の清水北5番の際にもコメントしたが、走力を生かすためにも、オフ・ザ・ボールの動きや、ファーストタッチで相手をおかすプレー、スピードに乗ったドリブル等を磨き、次のステージで大きく飛躍してほしい選手であった。13分、白百合の23番がアウトし、前半35番が鼻血を出した際に投入され、復帰した際にベンチに戻っていた20番が再度投入された。直後に館町は右DF18番が右サイドで粘ってボールを保持し、中央斜め後方のセンターMF23番に繋ぎ、23番がセンターFW15番へパスを出した。得点へのおいを感じるプレーであったが、白百合GK34番が判断良く飛び出してそのボールをキャッチしピンチを防いだ。白百合GK34番は、よく声を出して守備陣を引き締めるだけでなく、素晴らしいキックの技術も身に付けており、攻撃の起点にもなっていた。ジュニアユースに進んでさらに技術を磨くとともに、良い生活習慣を心がけて身長を伸ばし、大きく成長して行ってほしいと感じた選手であった。18分、館町左DF19番が顎を打ったのか、倒れたまま動けなくなり、審判がゲームを止め、8番と交代した。審判は本人に状況を尋ねるとともにすぐにベンチの指導者をピッチに招き入れる等、的確な判断をくだしていた。19分、白百合左DF15番がドリブルで館町ペナルティエリア内まで突き進み、ステップを踏んで相手を右にかわしてシュートをゴールに突き刺し決定的な3点目を奪った。さらに終了間際のアディショナルタイム、後半から投入されていた白百合センターFW18番が、ハーフウェイライン付近でゴールに背を向けて受けたボールをワンタッチでさばいて前に進み、もう一度縦パスを受けて左に繋いだ。そして、後方にステップを踏んで相手のマークを外してゴール前に現れ、左からのボールを受けて、落ち着いて館町GKの脇を抜けるシュートを突き刺した。この18番は非常に小柄な選手であったが、シッカリとしたボールコントロール技術を身に付けており、最後のプレーも非常に将来性を感じさせてくれた。ジュニア年代では早熟で背の高い選手が、その身体能力を生かして試合で目立つことが多いが、ユース年代に入って身体面でのアドバンテージがなくなると並みの選手になっているというケースがままある。逆にジュニア年代で背が低い選手の中には、その環境の中でどうすれば背の高い選手に対抗できるかを工夫する者がいる。強い気持ちで練習を積み重ね、何とか得点に絡もうとする選手の中には、サッカー的な動きを身に付けてユース年代で大きく飛躍する選手がいる。古くはペレやゲルト・ミュラー、マラドーナ、最近ではメッシ、日本では長友、今年になって大注目の井手口等は大人の中でも小柄な選手達である。まもなくブレイクするであろう久保建英は16歳の華奢な身体でも、足元の圧倒的なドリブル



ル力や走力、オフ・ザ・ボールの動き、攻守の切り替えの早さ、視野の広さと判断スピードの高さ、パスの精度といった身長とは関係のない要素でJ 1での活躍が期待されている。18番がどこまで伸びていくかは未知数であるが、最後のプレーではその可能性を感じさせてくれた。数年後に大きく成長した姿を見せてくれることを期待したい。

この試合を総括すると、個々の力やチーム全体の戦術理解度の高さで、白百合が館町を圧倒した試合といえるが、館町も後半の中盤には白百合のゴールに迫る時間帯があった。白百合の選手達には、中央大会で大いに暴れてきてほしい。一方の館町の選手達には、単に大差で負けたことにガックリするのではなく、白百合との違いは何だったのかをよく振り返り、今後の練習や試合でその差を埋める努力を継続して行ってほしい。まだまだ君達には伸びしろがある。やらされる練習をこなすのではなく、考えながら練習に取り組み、サッカーをさらに深く追求して行ってほしい。時にはコーチに練習の意味や狙いを尋ねてみても良いのではないかと考える。コーチもサッカーを学び続け、より良い練習を工夫して行ってほしい。数年後に君達の成長した姿が見られることを期待している。

---

一昨年度から、2つの試合の流れをお伝えする中で技術委員会からのコメントを交えさせていただいている。今回も本部席側で観戦をさせていただいたので、4チームのベンチワークも見ることができた。今年度は保護者席からの大きな声が気になったが、スポーツは観戦者の心を熱くさせるものである。ましてやそれが自分の子どもともなると思わず応援に力が入ってしまう気持ちはよく理解できる。PK戦を制した清水北の保護者が抱き合って喜ぶ姿は微笑ましいものであった。1試合目のレポートの中盤に記述させていただいたが、指導者の皆さんには、子ども達に周りの声に惑わされることなく自分で判断する習慣を身に付けさせるように、日頃の練習から繰り返し考えさせる指導を続けて行ってほしいと考えている。その上で、大人から「なんで〇〇の時にあんなプレーしたの？」と尋ねられたら「あの時は△△だったから、あのプレーの方が良いと判断しました」とさらりと答えられるような図太い選手が育ってくれることを願っている。今年度も子ども達自身がプレーの流れの中で、チームメイトに具体的な声やジェスチャーでボールを要求したり、プレーを改善しようとする場面に出会うことができた。これは誠に喜ばしい流れである。

この記事がHPにアップされる前に、残念ながらシルクロードやARTEも含め、八王子市内のチームは中央大会の1・2回戦で全て姿を消してしまった。確かに残念な結果ではあったが、このことで選手の皆さんは必要以上に落ち込む必要はない。『上には上が居る』ということをしつかりと認識して、謙虚な気持ちで技術を磨くとともに、戦術的な理解度と判断力を向上させて行って欲しい。君たちのサッカー人生はまだ始まったばかりで、サッカー選手としての完成期は、身体が大人のサイズに近づくユース年代以降である。

そして指導者の皆さんにも、進化し続ける最先端のサッカーを学び続け、そこから逆算してジュニア年代で身に付けるべき技術と戦術的な判断力を選手に要求し続けることを心がけてほしいと考えている。そのための学ぶ機会を今後も技術委員会は提供し続けるつも

りである。八王子サッカー協会技術委員会は、“八王子から世界へ羽ばたく子どもを育てよう”というスローガンを掲げている。世界で活躍のできる『創造的で逞しいプレーヤー』を育てるためには、ジュニア年代の指導者の皆さんには、ゴールデン・エイジを迎える大切な時期を担当しているのだという自覚を持った上で、具体的には以下のことを心がけていただきたい。

- ① 最先端のサッカーを学び続ける。
- ② 子ども達の最高のトレーニングの場である試合の最中には、サイドコーチングを極力少なくする。(→熱くなりすぎる保護者とは一線を画し、子ども達がコーチに頼らず自分で判断のできるプレーヤーへと成長できるよう、グッと我慢して見守っていく。)
- ③ ジュニア年代で身に付けるべき技術は、出来るだけコーチが実際にプレーをして見せてやる。
- ④ ジュニア年代で身につけるべき個人戦術とグループ戦術の基本を叩き込むために、それぞれの判断の意味(あるいは必要性)は、試合の場面のどこかを切り取った練習(→子ども達や保護者から「この練習は何のためにやっているのですか?」と尋ねられた時に、即座に説明のできるメニュー)の中で、子ども達にわかりやすい言葉で、粘り強く繰り返し教え込んでいく。

こうした流れが定着し、12ブロック各チームの子ども達のレベルがさらに高まっていくことを心から願っている。

※このレポートは試合を現地で観戦しながらメモを取り、記憶をたどりながらまとめたものです。ビデオで撮影して確認をしたわけではないので、背番号が間違っていたり、プレーの流れも正確ではないことがあると思われます。試合の正式な記録ではなく、あくまでも技術委員会からの見解を述べるためのレポートだということをご理解ください。